

# **Research into Japanese Ability: The Case of Students at Toyohashi University of Technology —— Honorifics, Kanji Stroke Order, etc**

**Yuko Suzuki**

It is said that there has been a decline in the scholastic ability of university students in Japan, and the Japanese ability of those students today has declined as well. With this in mind, Nakamori and Yamada conducted research into the ability of students at Toyohashi University of Technology to read and write kanji in 2005. And we announced the results in the article.

Therefore, we strongly felt the necessity to conduct research into the Japanese ability of students including kanji ability. So we conducted research on the ability of students at Toyohashi University of Technology to read and write kanji, proverbs, honorifics, kanji idioms, kanji radical identification, kanji stroke order, etc in 2006.

The results of this research are presented in this bulletin and are divided into four separate article.

The authors of these and the topics are as follows:

General Remarks: Yasuyuki Nakamori

Junior High School Level Kanji Ability: Yoko Yamada

Proverbs, Kanji Idioms, and Kanji Radical Identification, etc: Hironobu Hibino

Honorifics, Kanji Stroke Order, etc: Yuko Suzuki

# 大学生の日本語能力の現状・各論（敬語・ 書き順・語彙・表現） —豊橋技術科学大学生の場合

鈴木 裕子

## はじめに

ここ数年の日本語ブームは、老若男女を問わず日本語に対する意識を高めるのに役立っているようである。漢字検定の受験者数が増加し、日本語に関するテレビ番組や日本語関連の書籍も続々と登場している。一方で、若い世代の日本語力不足も問題視されている。敬語を知らない、漢字が書けない、など学力低下の顕著な例の一つとして挙げられている。実際のところ、本学学生の日本語力には、どのような特徴があるのだろうか。どのような点が優れていて、どのような点が劣っているのか。そして、どのように対処すればよいのか。

そこで今回の調査では、特に問題となっている敬語のほか、漢字の書き順、語彙や文法について、できるだけ正確に実態を把握することを試みた。

## I 敬語・書き順など

第5回調査では、敬語や漢字の書き順などについて、以下の出題形式で実施した。

一	敬語	誤りの訂正の記述	10 問
二	同音異義語	選択し記述	7 問
三	同訓異義語	選択し記述	7 問
四	同義語	語群から選択し記述	8 問
五	反対語	語群から選択し記述	8 問
六	書き順	矢印を記入	5 問

問題数は合計 45 問、配点は、一は各 3 点、二から六は各 2 点で 100 点満点である。

## 1 敬語

### (1) 敬語の誤答と構成比

下線部の敬語を正しい表現に直す記述問題である。どの問題も誤答率が高く、記述問題という性格上誤答のバリエーションも多かった。ただし、今回は完全な正解ではないものを減点対象とし、誤答に含めて割合を出したので、誤答率が上がってしまったことも事実である。以下、誤答（減点・無解答含む）率が高かった問題から順に誤答・減点対象と構成比を挙げていく。なお、特にことわらない限り、本稿における全ての正答率、誤答率のデータに留学生は含まない。

・「主任が、私からご説明になるよう申しておりましたので、…」の誤答率は 82.5% で、誤答の内訳は以下のとおりである。

- a 「説明するよう」 57.8%
- b 「ご説明させていただくよう・説明させていただくよう」 4.8%
- c 「ご説明になられるよう」 2%
- d 「説明いたすよう・ご説明いたすよう」 4.4%
- e その他（17 種） 8%
- f 無解答 5.6%

正解は「ご説明するよう」「ご説明いたしますよう」である。まだ社会人ではないので、ウチ・ソトの関係がわかりにくかったかもしれない。「私」が話している相手は取り引き先など、「ソト」の人間なので、自分の上司である主任にも謙譲語を使ってへりくだっている。当然、自分の行為にも謙譲表現を使うべきである。

この問題の全解答中最も多かったのが、尊敬表現も謙譲表現も使われていない a 「説明するよう」で、実に 6 割近くを占めている。実際の場面で使用しても不自然さは感じられないと思われるが、今回は減点対象とした。このような、ウチ・ソトの人間関係を考えずに、ニュートラルな表現で逃げてしまう方法は、無難で上手なやり方だとも言えるが、反面、いつまでたっても正しい敬語の使い方が身につかないのでは、との懸念がある。

b の「～させていただく」は、普段耳にすることの多い表現である。とても丁寧で控えめな表現のようだが、本来、さほど多用できる表現ではない。自分がしようとしている行為が、誰の許可が必要で誰の益になるのか、はっきりしない場面で使い続けていると、いつか滑稽な印象を与えてしまう恐れがある。

c は、問題文の間違いを増長させてしまっている。尊敬・謙譲の区別ができない学生が少数ながらいることがわかる。

d は、まさか時代劇の影響、というわけでもないであろう。現代社会で一般に使われている表現かどうか、の判断ができていない。学生の生活の中で敬語が身近でないことの、一つの証明のようにも思われる。

・「ただいまご紹介された、山田と申します。」の誤答率は 75.7% で、誤答の内訳は以下のとおりである。

- a 「紹介された・紹介されました・ご紹介されました」 20.3%
- b 「ご紹介にあがりました・紹介にあがりました・ご紹介にあがった・紹介にあがった」 5.2%
- c 「紹介にあずかった・紹介にあずかりました・ご紹介にあずかった・ご紹介あずかりました」 23.5%
- d 「ご紹介（を）いただいた・紹介（を）いただいた・紹介していただいた・ご紹介していただいた・紹介いただきました」 11.2%
- e その他（25 種） 10.8%
- f 無解答 4.8%

正解は「ご紹介（を）いただきました」「ご紹介にあずかりました」「ご紹介をたまわりました」「紹介していただきました」のいずれでもよい。

a と b は誤答で、a は受身形をそのまま残した解答である。受身形を使うことによって、迷惑なニュアンスになってしまうと感じ取ってほしかったのだが、予想以上にこの種の誤答が多かった。a の中でも「紹介された」「紹介されました」は、先の問題でも述べた、ニュートラルな表現で無難に乗り切ろうとした誤答だと思われる。仮にニュートラルな表現を使うなら、文全体を変えて「今紹介してもらった、山田です。」にしなければ釣り合いがとれない。「ご紹介されました」は丁寧に言おうという意識はあるが、残念ながら不十分である。b は「ご紹介にあずかりました」との混同であろうか。だが、これでは誰が誰を紹介するのが、全く逆転してしまい、わざわざ誰かを紹介するために馳せ参じた奇特定の人物、という意味に変化してしまっている。

c と d は減点とした。c は「ご紹介にあずかりました」、d は「ご紹介（を）いただきました」を正解として比較した場合、完全ではないと判断したからである。このように、ほんの 1 字 2 字で誤答・減点になった解答が、「その他」の中に含まれている。ほとんど 1 種につき 1 人の解答で、実にバラエティーに富んでいるが、抽出にはかなりの労力を要した。

・「何を召し上がりになられますか。」の誤答率は 72.1% で、誤答の内訳は以下のとおりである。

- a 「召し上がられますか」 15.9%
- b 「お召し上がりになりますか」 8.8%
- c 「召し上がりになりますか」 8.8%
- d 「お召し上がりになられますか」 7.6%
- e 「お召し上がりますか」 3.6%
- f 「お食べになりますか・お食べになられますか・食べられますか」 6.8%
- g 「いただきますか・いただかれますか」 3.6%
- h 「お召しになりますか・お召しになられますか」 3.6%
- i その他（17 種） 7.6%
- j 無解答 6%

ここでは「召し上がりますか」のみを正解とした。

「召し上がる」が尊敬の意を含んだ動詞なので、a～cのような二重敬語、dの三重敬語は誤答である。だが、実際には二重敬語あるいは三重敬語が日常的に使われていて、むしろこちらのほうが学生の耳に慣れているのではないだろうか。eは日本語として全くおかしいが、a～dと同様、「召し上がる」だけでは敬意が足りないと判断したのだと思われる。fは「召し上がる」が思い浮かばなかったのか、知らなかったのだろうか。いずれにしても、語彙力不足が感じられる。gは尊敬と謙譲が逆転している。しかし、このような、謙譲の表現を尊敬と間違えて使用している例が、実際の場面にはあるようだ。何かの説明会に出席した折、担当者から「(資料を) どうぞいただいでください」と言われて面食らったことがある。hの「お召しになる」は「着る」の尊敬語で、これでは全く意味が変わってしまっている。

・「椅子におかけしてお待ちください。」の誤答率は63.3%で、誤答の内訳は以下のとおりである。

a 「かけて」	38.2%
b 「お座りになって」	5.6%
c 「座って」	4.4%
d 「こしかけて」	2%
e その他 (11 種)	6.4%
f 無解答	6.8%

正解は「おかけになって」「おかけになり」「かけられて」のいずれでもよい。

最初に挙げた問題と同様の傾向が見られた。a、c、dはニュートラルな表現で、敬語の間違いを回避している、安易な解答といえる。ちなみに、a「かけて」は正解とほぼ同数だった。bは尊敬語の基本パターンに当てはめて作られているので、実際の使用場面では正解である。ただ、今回は問題文中の動詞が「かけて」なので、違う動詞を使ったという点で減点対象とした。

## (2) 敬語の誤答の特徴と考察

今回、学生の誤答のバリエーションの多さに辟易しながら抽出していった結果、敬語の誤答・減点対象には二つの傾向があることがわかった。一つは敬意を表す表現を回避し、ニュートラルな形で乗り切ろうとするものである。もう一つは、とにかく丁寧にしようとして二重・三重敬語にしてしまうものである。いずれにしても、敬語を正しく使えない、という点では共通している。

その原因の一つとして、敬語表現を体系として覚えているのではなく、場面ごとに覚えているのではないかと考えられる。例えば、書店に並んでいる敬語関係の本は、たいてい基本的な尊敬・謙譲の動詞の形の説明はほんのわずかで、大部分は場面別の表現が列挙されているものである。接客関係のアルバイト敬語も同様で、場面別の言い方がマニュアル化されているだけで、敬語を体系として教えているわけではない。このような、場面別の言い方をいくら暗記したとしても応用力に乏しく、本当に使える敬語が身につけているとは言い難い。

そこで、初めて敬語を教える時、まずは動詞だけでも思い切って体系化・合理化し、どんな動詞でも尊敬語と謙譲語が作れるパターンとして教えてはどうだろうか。一例として、外国人に対

する日本語教育では、尊敬語は「お～になる」と「～れる」、謙譲語は「お～する」という文型として教え、様々な動詞を尊敬・謙譲の形に変化させて覚える。そして、会話の場面を想定し、話す相手によって敬語を使うべきかどうか判断し、適切な表現を使う練習をする。その他「召し上がる」などの尊敬の意を含んだ動詞、「拝見する」などの謙譲の意を含んだ動詞も一覧にして提示する。この一覧は暗記するしかないが、よく使われる動詞はそれほど数多くないので、むしろ「これだけ覚えれば敬語が使えるのか」という安心感にもつながっているようである。

日本人学生にもこのような方法は有効ではないだろうか。様々な応用が利く「万能敬語製造パターン」を手に入れば、面白がって話しているうちに自然に正しい形が口をついて出てくるようになる。正しい形がわかってから、敬語を使う場面を細かく教えても遅くはないだろう。

少なくとも、正しい形を作ることができれば、これほどの誤答のバリエーションは出なかっただろうし、1字2字の間違いは格段に減ったと思われる。

## 2 同音異義語、同訓異義語

### (1) 同音異義語の誤答について

2つの同音異義語から、文意に合っている方を選ぶ問題である。二者択一のため誤答率は低かった。無解答も7問中5問に1人ずつであった。唯一、誤答率が高かったのは、

「責任を <u>つい</u> きゅうする。」	33.1%
------------------------	-------

だった。選択肢は「追及」と「追求」で正解は「追及」である。この問題だけ誤答率が高くなったことについては、他の問題に比べて単語そのものの馴染みが薄い、漢字からの意味の推測がしにくい、二つの選択肢の意味がよく似ている、などの理由が考えられる。

その他の問題と誤答率は、

「校則に <u>めい</u> きしてある。」	8.0%
「計画書を <u>さく</u> せいする。」	7.6%
「 <u>せい</u> とうな理由があれば許す。」	4.8%
「若者を <u>たい</u> しょうにした本を出す。」	3.2%
「テストは <u>い</u> がいに難しかった。」	1.6%
「このままでは倒産は <u>ひ</u> っしだ。」	1.2%

であった。

### (2) 同訓異義語の誤答について

同音異義語と同様の形式で、こちらも誤答率は低かった。無解答も全7問に各1人であった。誤答率が10%を超えたのは、

「水面に顔を <u>うつ</u> す。」	25.1%
「息が <u>とまり</u> そうになる。」	11.2%

の2問だった。「うつす」の選択肢は「写す」と「映す」で、正解は「映す」である。2つの漢

字の意味が似ていることから、誤答が多くなったと思われる。「とまり」の選択肢は「止まり」と「留まり」で、正解は「止まる」である。あくまでも推測だが、「留まり」を選んでしまった1割強の学生は、「止まる」というと完全にストップしてしまい、死をイメージさせるので回避したのかもしれない。

その他の問題と誤答率は、

「網の目が <u>あらい</u> 。」	4.4%
「 <u>かわ</u> のカバンを買う。」	3.6%
「会議で議長を <u>つとめる</u> 。」	3.2%
「税金を <u>おさめる</u> 。」	2.8%
「川に <u>そって</u> 道がある。」	2.4%

であった。

### 3 同義語、反対語

#### (1) 同義語の誤答について

単漢字群から1字選び、空欄に記入して2字熟語の同義語を作る問題である。単漢字群があり、しかも1字1回必ず使われることから、誤答率は非常に低かった。最も誤答率が高かった問題は「絶無＝（ ）無」で8.4%だった。正解は「皆」である。無解答は全8問中5問に2人ずつ、3問に1人ずつであった。

誤答の中で目立ったのは、漢字の字形ミスである。「互角」の「角」の真ん中の棒が下まで突き抜けてしまっているのが5人、「皆無」の「皆」の下が「日」になってしまっているのが16人もいた。

#### (2) 反対語の誤答について

同義語と同様の形式で、こちらは反対語を作る問題である。これも誤答率は低く、全て5%未満だったが、やはり字形ミスが目立った。「抑制」の「制」の左側が縦棒1本で貫かれておらず、「先」の上半分と「巾」をくっつけた形になってしまっているのが10人、「縦断」の「縦」のぎょうにんべんが抜けてしまっているのが9人いた。

同義語、反対語ともに、誤答のほとんどをこのような漢字の間違いが占めていたことは驚きであった。問題用紙の漢字をそのまま写すだけの作業である。これは写し間違いというよりも、間違った形で定着してしまっていると考えられる。もし、記入ではなく、記号を選択する形式なら明らかにならなかった問題点である。小学校から高校までの現場では、漢字の授業時以外に漢字の字形をチェックすることがあまり行われていないのではないかと、ということが疑われる。

### 4 書き順

何画目はどこか、指示された画を解答用紙の漢字に矢印で記入する問題である。

群を抜いて誤答率が高かったのは「飛」(4画目)で、以下、「右」(1画目)、「左」(1画目)、「猫」(2画目)、「遠」(12画目)の順だった。

「飛」(4画目)の誤答率は66.5%だった。誤答のバリエーションは9画目以外のすべての画にみられ、その構成比は、

5画目	35.9%	7画目	13.1%
3画目	8.8%	その他	7.6%
無解答	1.2%		

で、誤答の半数以上が5画目であった。3画目までは正確に書けているが、その後つい左から書いてしまっているのだろう。また、7画目という答は、1～3画目と同じ形を、まず2回繰り返して書いているものと思われる。3画目という答は、1画目を2画に分けて数えてしまったと考えられる。それにしても、総画数たった9画の漢字なのに、これほど多量の誤答が出てくるのは、書き順に対する意識の薄さを露呈していると言えるのではないだろうか。

「右」(1画目)の誤答率は30.7%、「左」(1画目)の誤答率は25.5%だった。この2字の誤答は、100%両者を取り違えたものだった。「右」と「左」の1画目は違うという知識は持っているが、普段書く時には両者同じ順序で書いているのではないか。それで、いざ試験で問われると、どちらがどちらだったかあやふやになってしまったのではないかと推測できる。

「猫」(2画目)の誤答率は24.7%だった。誤答の構成比は

1画目	14.7%	3画目	7.6%
その他	0.8%	無解答	1.6%

で、偏に集中していた。なんとなく偏から書くということはわかっていても、正確な書き順にまでは注意を払っていないことがうかがえる。

「遠」(12画目)の誤答率は、15.1%だった。誤答の構成比は

13画目	5.2%	1画目	4.4%
その他	4.4%	無解答	1.2%

だった。13画目という誤答は、しんにゅうの2画目と3画目を続けて書いているために起きた間違いだと思われる。しかし、1画目という誤答はどういう順序で書いているのか、まったく想像がつかない。

## II 語彙・表現

第6回調査では、以下の内容と出題形式で実施した。

一	レポート・論文の言葉	誤りの訂正の記述	10問
二	複数解釈できる文	読点の記入	5問×各2
三	接続詞	選択し記述	7問
四	複文の主語	主語の位置の指示と主語の記入	3問×各2



五   ねじれ文

誤りの訂正の記述   6問

問題数は合計 39 問、配点は、一は各 3 点、二から四は各 2 点、五は各 6 点で 100 点満点である。

1 レポート・論文の言葉

下線部の言葉を適切な表現に直す記述問題である。全 10 問中、3 問が突出して誤答（減点・無解答含む）率が高かった。以下、誤答率が高かった 3 問について、順に誤答・減点対象と構成比を挙げていく。

・「問題なんだ。」の誤答率は 79% で、誤答の内訳は以下のとおりである。

a	である	57.6%
b	だ	7%
c	なのです	6.2%
d	です	2.3%
e	その他	4.7%
f	無解答	1.2%

「ん」が話し言葉の表現なので、これを「の」に直すのが正解である。誤答の中で圧倒的に多かったのは a であるが、この解答は強調を表す「ん（の）」が消されており、ニュアンスが変わってしまっている。b も同様で、合わせて全体の 6 割以上を占めている。

a と b の解答者は、レポート・論文の文末表現として「である」を使うということを知っていて、おそらく実際に使っている人であろう。しかし、「ん」を単なる話し言葉の表現としてしか捕らえられず、書き言葉にはそぐわない、と判断して消してしまったのではないだろうか。あるいは「レポート・論文の言葉」と言われて必要以上にかしこまってしまい、強調表現を使うこと自体が押し付けがましく、ふさわしくないと考えてしまったのかもしれない。

また、c と d の解答者は、文末を常体から敬体に変えてしまっている。この解答者は、自分が文章を作成する時にも文体の使い分けができていないと思われる。学生のレポートを見ても、時折、常体と敬体が混在する文章を見ることがある。こういった間違いは、日頃から様々な文章を読んでいればおのずと減るはずであり、文章を読むことが苦手な学生がおかしやすいミスではないかと推測できる。

・「だんだん多くなる。」の誤答率は 46.3% で、誤答の内訳は以下のとおりである。

a	除々に（漢字ミス）	26.1%
b	序々に（漢字ミス）	2.7%
c	その他の漢字ミス	1.2%
d	少しずつ	3.9%
e	徐々	1.2%
f	その他	8.9%
g	無解答	2.3%

全体の3割は漢字の書き間違いである。そのうちの大半は「除々に」で、事前に予想された間違いであった。ただ、今回はひらがなで「じょじょに」と書かれたものを正解にしてしまったので、せっかく漢字で書いたのに、そのせいで誤答になってしまったのは気の毒な気もするが、やはり漢字に対する注意力不足の感は否めない。

参考までに、正答の種類と構成比は、「徐々に」19.8%、「じょじょに」17.5%、「次第に」16.3%だった。漢字がわからない時、ひらがなで乗り切ってしまうのは安易だが、パソコンで文書を作成するのが当たり前の現代においては有効な手段なのかもしれない。人はこのようにして、徐々に漢字を忘れていくのであろうか。

・「いっぱいサンプルがある。」の誤答率は36.6%で、誤答の内訳は以下のとおりである。

a	たくさん（の）	20.6%
b	大量の	5.1%
c	大量に	1.9%
d	多量の	1.9%
e	複数の	1.6%
f	その他	5.1%
g	無解答	0.4%

aの解答者は、「いっぱい」はいかにも幼稚で、「たくさん」のほうが硬い表現であり書き言葉として適当である、と判断したのであろう。また、b、c、dは数ではなく、量で勝負してしまっているが、とにかく漢字の熟語を探して当てはめたようだ。どちらにしても語彙力不足が感じられる。

## 2 複数解釈できる文

二通りの意味に解釈できる文に読点を打ち、解釈を一つだけにする問題である。誤答率が高かったのは以下の3問で、誤答と構成比も合わせて挙げておく。

・「私は昨日父と母へのプレゼントを買いに行った。（一人で買いに行った）」の誤答率は29.6%だった。

a	私は、	22.2%
b	父と、	4.3%
c	母への、	2.3%
d	プレゼントを、	0.8%
e	無解答	0%

正解は「昨日、」である。aでも指示された意味には解釈できるが、意味の区切りを考え、読点は時を表す言葉の後に打つのがよいと判断し、不正解にした。したがって、aの解答者は、他の誤答の解答者より、読点の機能がある程度わかっている学生であると言える。bは一人ではなく、父と一緒に買いに行ったという意味に変わってしまう。cとdの解答者は、ただやみくもに

打っただけで、読点の機能がわかっていないのではないかとと思われる。

・「今回販売する製品は、アメリカで開発されたコンピュータで温度を制御する保冷库である。（保冷库がアメリカ製）」の誤答率は21%だった。

- |   |          |      |
|---|----------|------|
| a | アメリカで、   | 8.6% |
| b | 制御する、    | 5.4% |
| c | コンピュータで、 | 4.3% |
| d | その他      | 1.2% |
| e | 無解答      | 1.6% |

正解は「開発された、」である。aは、「アメリカ製」に影響されてつい打ってしまった、bは「保冷库」に影響されてとりあえず打ってしまったのだろうか。どちらも読点の機能が理解できていないものと思われる。

・「彼女は真っ青な顔で追いかけてきた叔父の腕にしがみついた。（叔父の顔が真っ青）」の誤答率は14.8%だった。

- |   |      |      |
|---|------|------|
| a | きた、  | 5.1% |
| b | 顔で、  | 4.3% |
| c | 腕に、  | 3.9% |
| d | 叔父の、 | 1.2% |
| e | 無解答  | 0.4% |

正解は「彼女は、」である。上の問題と同様、「叔父」や「顔」に影響されて、その前後でとりあえず読点を打ったように思われる。

以上の結果から、少数ではあるが、読点の機能を理解していない学生がいることがわかった。ひょっとしたら、今回正解だった学生も、日頃文章を書く時には無意識に読点を打っているのではないかと、との疑いもある。中には、携帯のメールなどでは全く読点を打たずに文章を作成している人もいるかもしれない。現代は、手書きで文章を書く機会が少なくなる一方である。手書きの場合、読点を打たないと非常に読みづらいが、ワープロソフトを使う場合、文字の形や大きさ、文字間隔が均等なので、読点を打たなくてもある程度は読めてしまう。読点の機能は読み手の便宜だけでなく、書き手にとっては文章構成が考えやすくなる、という利点もあるだろう。読点に対する意識が払われなくなることは、日本語力の低下に拍車をかけるのではないかと危惧している。

### 3 接続詞

2つの選択肢から、文意に合っている方を選ぶ問題である。二者択一のため誤答率は低かったが、最も高かったのは下のaの問題、次に高かったのはbの問題であった。

- a 「問題は産業公害から都市生活型公害（いわば／つまり）自動車排気ガスや生活排水の問題へ変化してきた。」24.5%

b「内容はひととおり調べた。(ところで／さて)その中から一つを選ぶとなると迷ってしまう。」 8.2%

この2問は、他の問題に比べ、選択肢の2つの意味がよく似ているため、迷ったものと思われる。

特にaは区別がつきにくかったのであろう。「いわば」も「つまり」も言い換えの接続詞であるが、「いわば」は何かに例えて言う場合に使われる。「沖縄は、いわば『日本のハワイ』である。」という使い方である。また、bの「ところで」も「さて」も話題を転換する接続詞であるが、「さて」にはもう一つの使い方「前に起こった事態を軽く受けて、その後続く事態を導く」があり、今回の問題はこの使い方である。

時折、学生のレポートの中で、1文が非常に長く読みづらいものを見かける。そんな時、接続詞をうまく使いこなせれば、もっとすっきりした読みやすい文章が書けるのではないか。内容の良し悪しではなく、表現の一工夫で読み手に伝わる文章になる、という意識を持って文章を作成してもらいたいものだ。接続詞は、わかりやすい表現のための、役に立つ道具の一つである。

#### 4 複文の主語

文の中の、主語の必要な箇所に「／」を記入し、補う主語をその脇に書くという問題である。誤答率は低かったが、唯一、

・「日本語は述語を文の最後におく特徴を持っているため、英語やフランス語を学習する時とまどうことが多い。」の主語を書く問題だけが、誤答率 37%と突出していた。誤答と内訳は、

a 「日本人が」	12.1%
b 「日本語は」	3.9%
c 「述語に」	1.6%
d 「述語は」	1.2%
e その他 (16 種)	8.6%
f 無解答	9.7%

だった。

正解は「日本人は」「私たちは」などである。aは文法上の誤りではないが、指示が「主語を書きなさい」であったので、格助詞「が」は減点対象とした。aの解答者はおそらく、問題文の中に「日本語は」があるので、2度も「は」を使うのには抵抗があったのだろう。

それにしても、4割近くの学生が正解を導き出せなかったことと、予想を上回る誤答のバリエーションが出てしまったことに驚いた。もともと、問題作成の時点で、正解が一つではないので解答しにくいのでは、という心配があったのだが、文意が通る解答はすべて正解にする、と決めて実施してみた。その結果、正解も9種類にもなってしまった。確かに他の問題に比べて手がかりが少なく、難易度が高いと言える。だが、せめて「学習する」「とまどう」から、主語は人間である、という想像ぐらいはできたのではないか。次の「ねじれ文」のところでも述べているが、

間違っている文や不完全な文を読んでも違和感を覚えない学生が、少数ではあるが確かにいることがわかる。

## 5 ねじれ文

主語と述語が対応していないねじれ文について、下線部を書き直すという問題である。全6問中、2問は誤答率が10%以下だった。それ以外の4問について、誤答率と誤答の構成比は次のようになっている。

・「わが社の当初の計画は、2年間の実験的な使用を経た上で、本格的に導入するかどうかを決定しようと考えておりました。」の誤答率は61.1%だった。

a 「わが社の当初の計画では」	26.1%
b 「わが社は当初の計画では」	3.5%
c 「わが社の計画では」	3.1%
d 「当初の計画は」	1.6%
e 「わが社の当初の計画としては」	1.6%
f 「わが社では」	13.2%
g その他（11種）	5.1%
h 無解答	7%

述語「考えておりました」に対応して、主語を「計画は」から「わが社（で）は」に直す問題である。ところが、誤答のaからeまで、全体の35.9%が、主語が「計画」のままであった。これは、正しい主語が「わが社」で、述語の「考える」という人間的な行為と結び付けにくかったのではないかと考えられる。もちろん、会社や学校が一個の人格となって、「考え」たり「認め」たりすることは文法的には間違いではない。

また、fは「当初」が抜けているだけなので、文法的には正しいが、減点対象とした。

・「私がこの映画を観て感じたことは、戦争の恐ろしさと愚かさがよくわかった。」の誤答率は30.4%だった。

a 「私がこの映画を観て」	5.8%
b 「私がこの映画を観て分かったことは」	1.9%
c 「私はこの映画を見て」	13.2%
d その他（11種）	5.8%
e 無解答	3.5%

述語「わかった」に対応して、主語を「感じたことは」から「私は」に直す問題である。最も多かったのはcで、これは「観て」の漢字違いということで、減点対象としたが、文法的な間違いではない。aは格助詞「が」を使っていることから主語とはいえないと判断し、減点対象とした。

・「ボランティア活動に参加してうれしかったのは、人に喜んでもらえるようなことが私にもで

きるのだとわかってうれしかった。」の誤答率は 27.6% だった。

a 「わかったからだ」	17.9%
b 「わかった」	1.6%
c 「わかってうれしかったことだ」	1.9%
d その他 (11 種)	5.1%
e 無解答	1.2%

主語「うれしかったのは」に対応して、述語を「わかったことだ」に直す問題である。a は文法的には間違いとは言えない。だが、元の問題文とは文意が異なり、理由の説明になってしまっている。ここでは誤答とした。したがって、a の解答者は、元の文が変だということに気づいているので、他の誤答解答者に比べて日本語に対する意識が高いと言える。

・「私の夢は、各地のすばらしい岬を水彩画にしながら海沿いに日本を一周したいと思う。」の誤答率は 17.1% だった。

a 「日本を一周したい」	7%
b 「日本を一周すること」	1.9%
c 「日本一周です」	1.6%
d その他 (11 種)	4.7%
e 無解答	1.9%

主語「夢は」に対応して、述語を「日本を一周することだ」に直す問題である。a は「思う」を取っただけで、「夢は」に対応しないことに変わりはない。また、b のように名詞で文を終わらせてしまう解答も、少数ながらあった。日頃のレポートにもこういった体言止めの文が見られるが、マンガや雑誌の文体の影響であろうか。何かの注意書きや新聞の見出しならともかく、レポートにはあまり多用しないほうがよい。

ねじれ文の問題を通して、1 文の長さにかかわらず、主語と述語が対応していないことに気づかない、変だと思わない人がいることがわかった。それは無解答の数や誤答のバリエーションの多さから見て取れる。それらの誤答も、元の言葉を少し変えてあるものの、主語は変わっておらず、根本的に何を問われているのかがわかっていないものばかりだった。つまり、出題されているのだからどこか直さなければならぬ→だが、よくわからない→とりあえず何かひねり出してみる→どうしてもわからない場合は空欄で出す、という一連の考えの結果、こうなってしまったのではないだろうか。

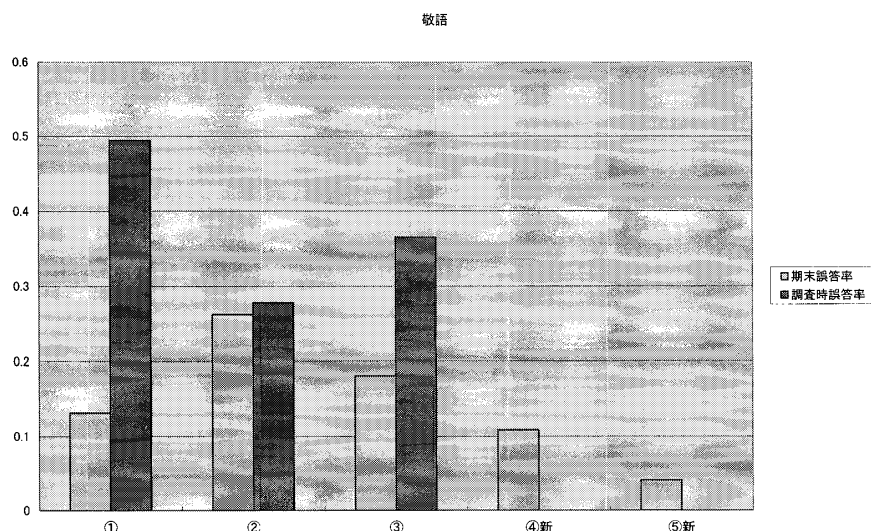
### Ⅲ 期末試験

期末試験では、敬語から 5 問（既出 3 問、新規 2 問）、漢字の書き順から 5 問（既出 3 問、新規 2 問）、レポート・論文の言葉から 5 問（既出 3 問、新規 2 問）、ねじれ文などの文法問題から 5 問（既出 2 問、新規 3 問）出題された。なお、期末試験では 2 学期と 3 学期で若干問題が変え

であったので、誤答率は2学期実施分（解答総数 221）からのみ算出した。

## 1 敬語

既出問題 3 問について、調査問題実施時と期末試験時の誤答率の変化は以下のとおりである。



①「学長が申されたことに賛成いたします。」49.4%→13.1%

②「教室にお子さんの作品が展示してありますので、拝見してください。」32.7%→26.2%

③「お上手ですが、どれくらい練習いたしましたか。」41.4%→18.1%

第1問と第3問は大幅に減少しているが、第2問はそれほど大きな変化は見られなかった。また、新規問題2問の誤答率は以下のとおりである。

④「では午後からそちらへ、いらっしゃいます。」10.9%

⑤「私は、今日のおやつにプリンを召し上がります。」4.1%

一見してわかるとおり、新規問題の方が誤答率が低かった。この結果の原因について、既出か新規かということを除いて考えてみると、第1問から第3問（既出）は、自分以外の人の行為についての敬意を表す問題である。一方、第4問と第5問（新規）は、自分の行為についての問題である。他者よりも自分の行為についての方が、場面を想像しやすかったのではないと思われる。

一般的には、既出問題の方が誤答率は低いはずだが、敬語に関してはそうではなかった。これは前述の通り、敬語を体系として覚えていないことが原因ではないかと考えられる。「トラベル英会話」のように文を丸暗記しても、完璧に暗記しきれず1字2字間違えたまま覚えてしまったのではないだろうか。敬語は子どもが成長するにしたがって自然に身につくものではなく、誰かに教えてもらわなければわからないものである。その意味では、敬語は外国語を習うように学ぶ必要があるといえる。繰り返しになるが、外国語教授法を参考に、敬語の教え方を検討する必要があるのではないだろうか。

## 2 書き順

既出問題は3問とも、調査問題実施時より誤答率が下がっている。誤答率の変化は以下のとおりである。

- ・「左（1画目）」25.5%→4.1%
- ・「遠（12画目）」15.1%→3.2%
- ・「飛（4画目）」66.5%→12.7%

また、新規問題2問の誤答率は以下のとおりである。

- ・「角（5画目）」48.4%
- ・「席（8画目）」37.1%

書き順の問題に関しては、既出と新規ではっきりと誤答率の差がついた。一度学習した問題の習熟度が高いことは良いことだが、他の漢字にもぜひ応用してもらいたい。学生の手書きのレポートで、2、3画を続けて1画で書いてしまっている漢字がよく見られる。書き順や画意識がいいかげんで、そのせいで漢字の形が崩れているようである。このようないいかげんさを見過ごしてきた結果が、同義語・反対語の項で述べた字形の間違いの定着なのではないか。定着してしまった間違いを、大人になってから訂正するのは難しい。ぜひとも初等教育での徹底した指導を求めるものである。

## 3 レポート・論文の言葉

既出問題は3問とも、調査問題実施時より誤答率が下がっている。誤答率の変化は以下のとおりである。

- ・「ぜんぜん研究されていない。」3.9%→0.9%
- ・「もっと必要になるだろう。」11.3%→2.3%
- ・「書いちゃった。」19.1%→2.7%

また、新規問題2問の誤答率は以下のとおりである。

- ・「ダイヤっばくかがやいている。」6.8%
- ・「やっぱ書き直した方がよい。」3.2%

こちらも誤答率は高くはない。一度調査問題で書き言葉に対する意識を持つことができたので、期末試験で新規の問題が出題されても自らの語彙力でカバーできた、と言えそうである。

## 4 ねじれ文などの文法問題

既出問題は2問とも、調査問題実施時より誤答率が下がっている。誤答率の変化は以下のとおりである。

- ・「この電車は浜松行きの普通電車です。次の停車駅は二川に止まります。」2.7%→0.9%
- ・「ボランティア活動に参加してうれしかったのは、人に喜んでもらえるようなことが私にもできるのだとわかってうれしかった。」27.6%→10%



また、新規問題 3 問の誤答率は以下のとおりである。

- ・「高校生活は、充実に日々を送ることが出来た。」 23.5%
- ・「春が来ても、谷川の水はとけられなかった。」 14.5%
- ・「僕には、どんなに持ち上げようとしてもその石は持ち上げられなかった。」 18.1%

こちらは、明らかに新規問題の方が誤答率が高くなっている。これらの問題は、調査問題にはなかった文法問題である。まったくの初出とはいえ、予想以上に誤答率が高かった。特に、最初の「充実」の品詞間違いの問題は、4 分の 1 近くの学生が不正解であった。原因としては、会話における形容詞・形容動詞の誤用の影響が考えられる。「元気してた？」などはかなり以前から使われているが、ほかにも「きれいかった（きれいだった）」「むずい（むずかしい）」など、わざと使っているうちに定着してしまった誤用がいくつも存在する。この誤答率を見る限り、形容詞・形容動詞の乱れを指摘しないわけにはいかないであろう。

Ⅱ－5 ねじれ文の項でも述べたが、今回の学生の中に、文法の間違いを变だと思わない人がいることがわかった。こういった学生は、期末試験に向けてとりあえず既出問題の正解を丸暗記して臨んだが、根本的な問題は解決していなかったので新規問題には歯が立たなかった、と考えられる。

しかし、既出問題の方が多少なりとも誤答率が下がったということは、多くの練習問題を取り入れてトレーニングを積み、新規問題の誤答率も下がるのではないかと、という可能性が感じられる。

## おわりに

日本語力がある、ということは単に日本語の知識が豊富なことを意味しているのではない。それは伝えたいことを読み手にわかりやすく伝える技術、と言えるのではないだろうか。意味の通らない、ねじれた文を書かないように、1 文の長さを調節し、接続詞でうまくつなぐ。複数解釈を避けるために読点を適切に打つ。あることを表現するのに、よりふさわしい単語が選べるように語彙力を高め、自分の選択肢を多く持つ。こういったことは、特に大学生には求められる力である。そして、これらは生まれつきの能力ではなく、練習によっていくらかでも高められるものである。

今回の調査を通して、今の学生は学習能力は高いのに、日本語のトレーニングが不足しているのではないかと、いうことを強く感じた。学生には、今回の試験をきっかけとして、日本語に対する意識を高めてもらえればと切に願う。一方、大学生になってからでもできる日本語のトレーニングがあるはずである。今後どう対処していくか、授業を提供する側も考えなければならない問題である。

## 参考文献

『大学生のための文章表現入門』（速水博司著 蒼丘書林 2002年12月）

『教師と学習者のための日本語文型辞典』（グループ・ジャマシイ編著 くろしお出版 1998年2月）